

# 少女「エビ」

——エリオットの傑作「サイラス・マーナー」中の可憐の少女——

東京女子高等師範學校教授 岡 田 み つ

「エビー」はエリオット(G. Elliot)の作「サイラス・マーナー」(Silas Marner)といふ小説の中に現はれて居る少女である。此の無邪氣な少女が世を恨み人に背いて居た「マーナー」の頑な心を不知不識の裡に和げるといふのが此の小説の筋の一部である。

扱無心の子供が如何やうの心の人に感化を及ぼしたかといふに、先「サイラス・マーナー」といふ男の半生を、大略述べなければならぬ。サイラスは十九世紀の初、英國の片田舎に機織を業としてゐて信仰心の厚い若者であつたが、二なき者と信じて居た親友に謀欺たはかられて、教會の金を盗んだとの濡衣を被せられた。「サイラス」は無實の罪を長老

達に訴へたが、其教會の習慣として、事實の真相を探るに、法律の手續に頼らず、嫌疑を受けた人が神の前で鬪を引き、之で罪の有無を判決するものであつた。あはれ「サイラス」は有罪の鬪を引きあてた！心に省みて疚き處なき彼は、人は信せずとも、神明は見をなはずと頼んだ事も徒あだとなつて、盜賊の汚名を受けた。其結果として婚約のあつた婦人には捨てられ、知己朋友に見放されて、彼は世を咒ひ神を怨んで、終に人知れず故郷を立ち去つて仕舞つた。

「サイラス」は「ラブロー」といふ小村に移り住んで、十五年を経過した。彼は村外れの小屋に獨居して、朝から晩まで機を織つてゐた。村の酒屋で

一杯の酒を傾けるでもなく、隣人の許へ立寄つて無駄口をきくでもなく、織物の注文を受けるか、必要の品を購ふ外には、絶えて人に物言ふ事もなかつた。ましてや我家に人を請じるなどの事は更に無かつた。其でなくてさへ、村人は他國者よと疑ひの眼で彼を見るのに、此のやうな風ではあるし、顔といへば蒼白で、眼が近眼の出目でめで、しかも時々四肢強直して失神する病があつたから、村の人は誰も恐ろしい無氣味な人だと思つてゐた。

それでも、靴屋の妻が急病に苦んで居るのを見て、「サイラス」は、此女に自分の心得て居る藥を與へて、忽ちにその苦を和げてやつた事があつた。之を縁に、彼は村人と交はり、元の人間に戻れば戻れたのを、迷信の強い村人が「サイラス」はお呪ひで病を癒す術を承知して居ると言ひ囃して、乳の出るやうにとか、百日咳を療治してくれとかいつて、金までも持參して、續々頼みに來たので、律義の「サイラス」は、偽りを以て金を儲けやうな

どの心は徹塵もないので、咒なんぞは知らぬくとブリ／＼腹を立て、斷つて仕舞つた。人々の方では意地悪い男だと思つて、其後は病氣や不慮の災に遇ふと「サイラス」に疾視された爲だなど、言つて、彼と村人との間は尙更遠ざかるのみで、彼は全く孤獨の生活を營んで、樂みもなく考もなく一個の機織機械と成り果てた。

かくて居る事十五年、彼の身にとつて唯一の變化は、徐々に金が溜つた事であつた。獄裡の人が壁に線を引いて時を劃して、心遣りとした果が、その線の増すのを何よりの目的とするやうになつたと云ふ如くに、「サイラス」も自然に積もりかけた金を、今はそれを殖さうとの念が、まづ先に立つやうになつた。彼はなる可く餘計に働いて、成る可く費用を少くして、成る可く餘計に蓄へやうと心掛けた。機臺の下の床の煉瓦を上げて、鐵の壺を据えて、其中に金銀貨を納めて置いて、夜になると其を取り出して、數へたり觸さわつたりして、

渴した者が水に對したと同じ心で、其格好や色を眺めた。彼の生涯は唯織ることゝ、溜めることとの二つの職務と成り終つて、その先は如何するといふ考は少しもなかつた。彼の腰は曲つて顔は萎びて黄色く、未だ四十歳にならないのに、子供等は「マーナー」老爺と呼ぶやうになつた。見掛けは實際怪げな、哀れな、無氣味の人であつたが、さて此男位好人物は無いので、貪欲ではあつたが人を害ねやうなどゝの念は皆無で、彼は信仰の光は消え愛情も枯れたので全力を擧げて稼業と金とに絶り付いてゐたのである。

かくてラブロー在住十五年目の暮に、第二の大變化が彼の身の上起つた！彼が一夜入口の戸に締りをせずに村へ用達に出たその間に、壺中の金は何者かに盗まれてしまつたのである！

哀れや「サイラス」は、茫然自失して爲すところを知らなかつた。杖と頼んだ支柱が折れて、最早依り頼むものがなくなつた。機臺は依然としてあ

つた。織り掛けの布も其儘にあつたが、足の下の寶は既になくなつた。數へたり觸つたりする樂みもなくなつては、夜も詰らなくなつた。いくら稼いだとて、少し許りの賃金は、手にする丈思ひ出の種であつて、その塵から積り／＼と山とする迄の辛苦を想像するに堪へなかつた。彼は唯嘆いて空漠の時を充たした。機臺によつて仕事を爲ながらも呻吟き、ポツ然と火の前に座つて、頭を抱へて聲低く呻吟つてゐた。

が却てこの不幸は、人々の「サイラス」に對する嫌疑の念を薄らがしめた。彼を狡猾の恐ろしい奴と計り思つて居た村人も、自分の物をさへ始末の出来ぬ哀れの者だと云ふやうになつて、物を呉れたり、言葉を掛けたり、慰めに來たりするものが追々出來て來た。

大晦日の夜のことであつた。近所の人は「サイラス」に戯れ半分に「今晚は起きて居て、徐夜の鐘を聴きなさい。運が向くといふから、紛失した金

が戻るかも知れない」と云つた。「サイラス」は夕景から幾度か戸を明けて外を眺めたが、降りしきる雪で遠くも見えないので、直に閉めて仕舞ふのであつた。最後に戸を開いた時は、雪は止んで、雲にも途切れが出来て居た。「サイラス」は暫時耳を澄してゐたが、體々たる天地の寂莫に打たれて、心の奥迄淋しさが染み込むので、ハタと戸を閉ぢた、……が實は閉めやうとした瞬間に、「サイラス」は例の四肢強直の病に罹つて、彫像の如くに見えぬ眼を見張つて、立ち竦むでしまつた。

「サイラス」はやがて我に歸つて、閉め掛けの戸を閉めた。自分には其間に何事も起つた感覺がないので、寒氣が身に染みるなど、思つて、爐火の許に戻つて、薪を直さうとすると、爐前の床に黄金とも見ゆるものがあつた！不思議に盗まれたあの金が、不思議に戻つて來た！と彼の心臓は烈しく鼓動し、手を伸す力も無かつた。見る／＼金塊は光を放つて大きくなるやうだ！やつと身を屈し

て彼は手を差し伸すと、ヤ、手觸りの堅い、手馴れた金貨でなくて、柔かい暖かい毛髪であつた。彼は愕然として其處に膝を突いて、熱と見れば、丸ツぼい、色白の幼児が、金色の髪の毛を散らして眠つて居た！昔死んだ小妹が夢に現はれたのか知らん？夢であらう？「サイラス」は枯葉や枯枝さし焼べて、火を盛にして祝たが、幻は消えないで、丸ぼちやの子供の姿と、見すばらしいその衣服とが分明と見えた！

やがて子供は目をさました。抱き上げる「サイラス」に縋り付いて、マ、／＼と云ふので、「サイラス」は我知らずやさしい聲を出して、すかし宥めて、粥に黒砂糖を加へて食べさせたり、這ひ廻る後を危み／＼追ひかけたりして、少時は萬事を忘れてゐた。少女は足が痛むといふらしく、靴を引張つて泣顔をするので、「サイラス」の鈍い心にも其と心付いて脱がせてやると、その靴が濡れてゐるので、幼児が雪の上を歩いて來たといふ事に

始めて氣が付いた。そこで子供を抱いて戸外に出て雪の上の小さい足跡を頼りに叢の傍にゆくと、子供はまたマ、くと呼んだ。見れば其處には半身雪に包まれて、叢に頭を埋めた人の死體があつた！さてこそこの幼児は、凍死した母親を離れて「サイラス」の家から漏れた火光に誘はれて、彼の家へと迷ひ入つたのであつた！

「サイラス」は凍えたる人を救はうと子供を抱いたまゝ、村の豪家を指して急いだ。丁度夜會の最中で男女の客が集まつてゐる部室へ、ノツツリと「サイラス」が顔を出したので、「何しに來た？」「エ！女が雪の中に死んでゐる！靜かにく！今すぐ醫師を遣るから」など、男の人等にコン／＼云つてゐる中に、婦人達は聞き付けて、愛らしい子供の傍へ寄つて來て「オヤ何處の子？」「雪の中に仆れて居るといふ人の子でせうよ」「そんならマーナ殿その子を此處へ置いて行きなさいと云はれて「サイラス」は「どうして／＼私の手から離すわけ

には行きません。私の處へ來たのですもの、私には権利があります」と思はず叫んだ。此の子をどう仕やうとの考は今迄はなかつたのだが、手放せと云はれて急に出した今の言葉は、「サイラス」に取つても意外の發見であつた！子供は輝く燈火や笑みこぼれてゐる婦人達に、氣を取られてゐたが、其にも飽きて、マ、く／＼と泣き出した。それでも「サイラス」にはしつかりと嚙り付いてゐた。かういふ風に「サイラス」は、失つた黄金の代りにこの子を天からの授りものゝ如くに得た。否「サイラス」は黄金がこの子供になつたのだとさへ信じた。

(未完)

### ○本會總會

例年の通り、本會總會を四月東京に於て開催いたします。昨年は珍らしい盛會でありましたが、今年は一層盛に有益な會にしたと思ひます。幹事の方でいろいろ計畫中でもありますが、會員諸君の御熱心な贊助を切望いたします。いづれ來號の本誌上に詳しく御案内いたす積であります。全國の會員諸君が多數來會下さるよう致し度いものであります。